

---

Made in The Dream

ごみだるま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Made in The Dream

### 【Zコード】

N1068BA

### 【作者名】 ごみだるま

### 【あらすじ】

都内の安いアパートに住んでいる青年ザ・グルームは、数日前から自分が殺人鬼になっている夢をよく見るようになり、時間を追うごとに夢と現実の区別が曖昧になっていく日々を送っている。

そんなある日、夢の中に謎の女性が現れて、「あなたが今握っているナイフよりももつと鋭利な刃物をあげるから、それと引き換えに今から一年前までの記憶を私に渡してください」と言った。よく分からぬまま彼女の言いなり通り要求を呑んでしまったザ・グルームは、それ以降殺人鬼になる夢は見なくなり、代わりに夢の中で

もう一人の自分にたびたび遭遇するようになる。

夢の中をさまよっていると、そこで知り合った人は言った。「ここは誰かの夢の中なんだ」

そしてそのうちに、ザ・グルームは自分の分身たちを切り殺し始める。

雑多なイメージの中で、誰かの夢の世界に閉じ込められた主人公が、「特別な誰か」を求めながら実の母親に復讐する話。

(　目が疲れてしまいそうなので、会話文や段落毎に改行をしています。ご了承下さい。)

## 登場人物（前書き）

参考程度に。キャラクター紹介が邪魔なようでしたら削除します。

## 登場人物

### ザ・グルーム

この物語の主人公、一人称は「俺」

ある日夢の中で出会った謎の女性に取り引きを持ちかけられ、殺傷能力の高い刀剣を得る代わりに、代償としてここ一年分の記憶を奪われる

現実世界で梶島夢子（後述）に好意を寄せているが、交際には至っていない

教会の十字架に仕込まれていた槍で戦う

### 千葉水簾

ザ・グルームが夢の中で出会う人物、一人称は「僕」

和装した青年で、日本刀で戦う

クリスチャンで、ザ・グルームとは教会で出会う

### あめり

ザ・グルームが夢の中で出会う人物、一人称は「私」

教会でオルガンを弾いていた、目のぱっちりした可愛い女の子  
病院（教会は病院のすぐ隣に設置されている）に知り合いが多い  
様子

### リリーさん

ザ・グルームが夢の中で出会う人物  
花魁風の格好をした二十代の女性で、千葉水簾とは知り合いらしい

ヒ力  
ザ・グルームの弟

つきしまゆめこ  
槻島夢子

ザ・グルームが好意を寄せている女性

## Introduction

エレベーターのドアが開くと、夜の病院の暗い廊下が延びていた。

明日の日曜礼拝でオルガンを弾けと言われて、楽譜を受け取りに行く次第なのだけど、私は肝試しをするために夜の病院へ来たわけじゃない。教会がこの病院の敷地内にあるから、道路を大回りするよりも病院の中を通ったほうが近道だと思ったから来ただけだ。

私の履いたスリッパの音以外何も音が聞こえない。非常階段の緑のランプだけが煌々と光っている。つやつやした白い廊下に映つてぼやけている緑の光をまたいで、私は二階の渡り廊下へ歩いて行く。終始病院の独特のにおいが鼻を突いている。セーターを着ているのにつすべら寒い。

夜の病院は私が思っていた以上に怖かった。この先にあるあの暗がりから誰かが見ているのではないか。閉じているドアが開いて誰かが私に襲いかかるのではないか。そんなことを考えてしまうほど、夜の病棟は怖かった。

病院の玄関を通つた時はまだ真昼だったのに、窓の外にはもう月が昇つている。さつきまで看護婦さんも先生も患者さんたちもいたのに、誰もいなくなってしまった。

「のりちゃん……？」

楽譜もらつこに来たよ、と廊下に向かつて話しかけてみる。もちろん

ん返事は返つてこない。薄明るいのに先の見えない闇が私の先に広がっている。

突然背後でガシャンと音がして、びくっと振り向くとエレベーターが閉まった音だった。心臓の音が耳元で聞こえるほどうるさい。洋服の下で不快な冷や汗を感じる。体が硬直した瞬間舌の先を前歯で噛んでしまった。痛い。

非常階段のランプからジリジリと音がしている。意外に田をやると細い三日月の下に駐車場と植え込みが続いているのが見える。

それにしても、一体どうしてみんないなくなってしまったんだろう。

自分でも情けなくなるくらい怖がりながら、私はちびちびと廊下を歩き続けた。私がちょっと楽譜を読めてピアノを弾けるからって、こんなに不気味な思いをするとは思わなかつた。

大丈夫、すぐにのりちゃんに会えるんだから。この渡り廊下を渡つて新館の病棟へ行つて、そこから階段を下りて外に出れば教会への一番の近道になる。大丈夫。ちんたら歩いたつてあと三分くらいで着くはずだ。

トイレの前を通り過ぎ、心電図やノートパソコンの置いてある前に来たところで、私は不意に左足の裏がぬめるのを感じて立ち止まつた。

壁に手をついてスリッパの裏を見てみる。水？ 私は廊下にスリッパを何度かこすりつけて、暗く白い廊下をまた歩き始めた。

が、今度は壁に触っていた手のひらが濡れている。汚い、と思つて、私は壁を見た。

……血だ。赤いというより赤黒い。飛び出たものが跳ね返ったような血痕と、それを引き延ばしたような跡がある。

その時、

「殺してやる」

私は全身が一気に凍りつくのを感じた。  
すぐ近くで男の低い声がした。私の行く先、廊下を折れたところ、  
自販機やソファーのあるあたりからだ。

私の頭の中は真っ白になつた。アドレナリンが体中を逆流するよう  
な感覚の中、血糊のついた壁に寄り掛かって一步も動けなくなつ  
てしまつた。

「あなたの今握っているそのナイフじゃ不満でしょう。私がもつと  
切れる刃物をあげます。そしてその代わりに、あなたから一年間分  
の記憶をもらいます」

急に若い女の人の声がした。男女二人が会話をしていることが分  
かつたが、女の方は妙にお気楽な話し方だ。声や息の大きさから、  
二人とも本当に近くにいることが分かる。足が動かないで話を聞  
くのに集中できてしまう。

「何を言つてゐるんだ。俺は殺人鬼じゃない。そんなものもらつてど

うする」

男が怒鳴った。

しかし私には話がさっぱり分からぬ。殺人鬼？ 記憶をもらう？ ファンタスティックだな、そう思った私は無意識に笑い出しそうになっていた。怖すぎて頭がおかしくなったのかもしれない。

「あなたが物欲しげにしているように見えたからです。でも代償は必ず頂きます。何でも与えるわけにはいきませんから。だってそしたら私がお母さんみたいでしょ？」

女人人がさらにわけの分からないことを囁つ。

私は戻ろうとエレベーターに向かってのろのろと動き始めた。帰ろう、帰つて病院の人々に知らせよう。私は一人の殺氣立つた声に背を向けて歩いた。でも相変わらず足が全然動かない。

その時、カラーンと音がして何かが廊下に投げ出された。

「あなたが殺人鬼かどうかなんて知らない。ただ、あなたが望んでいることを言つていいだけなんです、私は。私がいないとあなたはひとりぼっちになるんです。私には分かるんです」

暗くてよく見えないけれど、多分女人人が何かを投げたのだと思う。女人人は心なしか泣きそうな声でまくし立てた。そしてそれ切り一切喋らなくなつた。

「……」

どうする。私はまだがたがた震えている足を止めて考えた。二人は私に気づいて黙つたのだろうか。だとしたら、私は殺人鬼とやらに殺されるのだろうか。ああ、殺されるなんて、なんて現実味のない話だろう。痛いのだろうか。苦しいのだろうか。そう思つたあたりで、なぜか私はふと、これは夢なんじゃないかと感じ始めていた。そうして悩んだ末、寝息のような音が聞こえ始めたので、私は思い切つて廊下の曲がり角から顔をのぞかせた。

そこには、自販機の明かりのもと、ソファーの上で死んだように寝ている、よれたスースを着て眼鏡をかけた地味な青年がいるだけだった。

## リトル・ヨコハマ聖アンドレ教会

目が覚めると、俺は知らない部屋のソファーの上で横になっていた。

無機質な薄暗い部屋の中、灰色の四角いテーブルを挟んでソファーとパイプ椅子があり、ソファーには俺が寝ているが、向かいのパイプ椅子には見知らぬおばさんが座っている。おばさんは厚い本を開いていて俺を気にする様子がないので、俺が起きたことに気づいていないのだろう。

テーブルの向こうにストーブがある。ボタンの赤い色がすり減っている。その奥にテレビがある。まだブラウン管だ。凸面に天井の電気のあまり明るくない光が当たって白くぼんやりと光っている。隣に置いてある棚にはオルガニストや教会といった言葉が書かれた楽譜が詰めて並べてある。

ここがどこなのかは分からぬ。寝起きで頭がぼーっとしている。今何時なのかも分からぬ。俺は確か夢を見ていた。変な夢だった。顔は思い出せないが、女が現れて刃物をあげるだの記憶を取り上げるだの喋っていた。

遠くで車の通る音がする。部屋には他人の家の匂いが漂っている。

横になっている俺からはテーブルの下にあるおばさんの長いスカートとそれを覆うペイズリーの膝かけが見える。部屋の中はストーブが効いているのか暖かい。おばさんの座っているパイプ椅子の鉄パイプに膝かけの紫と緑の色が映つて細長く歪に引き延ばされている。テーブルの端から使い古されたクロスの角が垂れている。テー

ブルの脚にいくつも傷が付いている。子供が貼ったのかキャラクターのシールがべたべたと貼りつけられている。

「ここは誰かの家なのだろうか。

「おはよう」

ぼんやりしていた俺ははっとして上半身を起こした。誰かがブラシケットを掛けてくれたようで、背中からずり落ちそうになるのを手でつかんでまた掛けた。

唐突に挨拶されて俺は面食らつたが、おばさんは本を閉じて笑いかけてきた。

お腹周りのきつそうなタートルネックのセーターを着ている。顔が丸く堀が浅い。短いパーカーのかかった髪に白髪が目立っている。

壁に掛けられた小さい時計を見ると、針は十時半を指している。窓の外を見ると曇っていて空が真っ白に明るい。ミルクとアスファルトを混ぜたみたいだ。透明なドアの先には下駄箱が見える。小さな男の子が履くような白と青のラインのあるスニーカーが脱ぎ捨てられている。どこからか、車の通りすぎる時のような、換気扇を回すような音がしている。

「あの……」

まったくもって事情が分からない。俺が尋ねる前に、おばさんが

言った。

「昨日、中央病院の待合室で人が倒れているって聞いて、主人と一緒に見に行つたら、あなたがいたのよ」

音がだんだん大きくなる。おばさんの後ろの小さなコンロを見て、やかんでお湯を沸かしている音だと気づいた。笛を鳴らすような甲高い音に変わり、更に高音になり、耳をつんざく大きさになる。

そうだったのか。俺はへえと頷いた。

「体調が悪くて動けないのかと思つたけど、その後あなたの知り合いの人が来て、寝てるだけだし大丈夫って言つたのね。それで、こんなところで寝てたら寒くて風邪引いちやうだらうからつて、うちへ運んできたの」

おばさんは丸っこい顔で人懐っこく笑つて言つた。意外と肌の綺麗な人だなと思った。

五十歳くらいだろうか。孫にでれでれするにはまだ若い気がするので、差し詰め近所のおばちゃんといったところだろう。

それでも俺にはやつぱり話が分からぬ。端的に言つと俺は昨日のことをさつぱり覚えていなかつた。病院の待合室で寝ていたといふのも初耳で、なぜ病院にいたのか、誰かの見舞いに来たのかとか自分が医者にかかっているのかとか、それすら分からぬ始末だ。酔つっていて記憶が飛んだのかとも考えたが、体調は良いし、飲んだ

記憶もない。

しかもしもしこれで俺が怪しい輩だったら一体どうするつもりだったのだろう。どれだけお人好しなんだこの人は。

「知り合いで？」

気になつたので、俺は聞き返してしまつた。

「学生服の男の子。お友達かなと思つたけど、すぐどこかへ行つちやつた」

「あの、どんな制服でしたか？」

「黄土色っぽいブレザーで、ズボンがグレーの制服だつたよ

やかんの音が小さくなる。じばらくしてから、ゴトリと音がして俺の前にマグカップが置かれた。うつすらと湯気が立つていて。テーブルクロスの粗いレースがガラスの灰皿に透けて屈折している。灰皿の中は空だ。おばさんがそれを脇に寄せる。

温かい麦茶だつた。湯気と息で目の前が曇る。底に沈んだ茶葉がぐるぐると回つている。口腔に麦茶の香りが広がり鼻から抜けていく。

友達ではないだろう。俺の学校は紺色っぽいブレザーだった。だった？

やつぱりよく分からぬ。この人が誰なのかも分からぬ。知り合いつて誰だらう。俺のことを知つてゐる誰かだ。そいつは今どこにいるのだらうか。

ただ、夢を見たことは覚えてゐる。今も女の表情が瞼の裏にこびり付いて離れない。どんな顔をしていたのか思い出せないが、女の印象は覚えてゐる。俺をじつと見つめていて、でも話が通じなくて、俺を見ているわけぢやないような気がして、でもとても優しそうで、近寄つて肩を抱こうとしてきそうなのに、それが不快で女の前から逃げ出したくなる、そんな印象だつた。

「やつぱりえ、病院に用事があるからちょっと空けてしまつけど、あなたどうする？」  
「」  
まだ待つてゐる？ まあ、すぐ隣なのだけ

ほんやり考へてみるとおばさんが言つた。家には主人がいるし、何かあつたら主人に言つてね。おばさんは既にもここにしたニット帽をかぶりジャンバーを着て出かける支度をしていた。

起きてすぐ知らないおばさんに会つて、そのおばさんはすぐに外出する。俺はほほ流されるような感じで頷いた。

「病院の隣に住んでいるんですか

「やつぱりえは病院の中にある教会なのね。礼拝堂は一階にあるよ

おばさんはそう言つて、それから楽譜の並べてある棚の上に積まれたプリントを一枚取つて俺に渡した。見ると、薄いグリーンの紙

に教会の「案内と大きな活字で書いてあり、四角い枠が五、六個、その中に地図と住所が書いてある。右上にピンクのマーカーが引かれてあり、『リトル・ヨコハマ聖アンドレ教会』と書いてある。どうやらここにいたらしい。

「じゃあ、お留守番頼むね」

おばさんは俺を見てニット笑うと、ドアを開けて部屋から出て行つた。

やかんも大人しくなり、一人きりになつた部屋の中はとても静かだつた。

まだ熱いお茶を飲むと、マグカップの底にお湯が垂れていたらしく、黄ばんだレース模様のテーブルクロスの上が丸く濡れている。窓の外は相変わらず寒々しい。

おばさんは主人がいると言つていた。結婚してゐるんだ。俺はテーブルの端に退けられた灰皿を見ながらぼんやり考えた。タバコを吸うのは夫なのだろうか。妻と同じように旦那もふつくらした体型なのだろうか。むしろ逆にガリガリだったりして。そういうえば玄関にある小さな靴は夫妻の子供のものだろうか。靴からして男の子だと思うが、子供は一人じゃないかもしねない。

ソファーに座り直して背もたれに寄りかかると、ジャケットにしわが付いていることに気がついた。

俺はスーツのまま寝ていたらしい。俺は両手の指を組んで思い切り伸びをした。固まっていた体が伸びて気持ちいい。何時間くらい寝ていたのだろう。おばさんが帰つてきたら聞いてみよう。いやその前にお礼を言わなくては。

俺は眼鏡をかけていないことを思い出しても、ジャケットのポケットに手を入れた。目はそこまで悪くないが、あると助かる。中にはちゃんと眼鏡が入っていた。良かつた、つぶれていなし。俺は縁の黒い眼鏡をかけて、もう一度教会の案内に目を落とした。住所、電

話番号、司祭は細川……下の名前は何て読むのだろう。男の名前だ。それに地図、最寄り駅が書いてある。視界がクリアになつたことで、俺の頭はようやく回り始めた。リトル・ヨコハマとはこの辺の町並み一体の地名だ。友達もこのあたりにはいないし、住んだこともないでの、俺とはあまり縁がない。

おばさんは一階に礼拝堂があると言つていた。暇だし、入つてみようか。俺は麦茶を飲み干すと立ち上がつた。熱がじつとりと喉の中を下る。マグカップの内側にまだらにへばりついた茶葉が星座のように見える。俺にとつてはキリスト教なんてリトル・ヨコハマの町以上に未知だ。俺はドアを開けて外に出た。

「寒い……」

外は極寒だった。冬だなあと体感する。玄関に出るとすぐそばに鉄の階段があつた。手すりは空氣よりも冷たい。革靴が鉄を叩く。白濁した空には果てがない。すぐ近くに白い建物が見えた。あれが多分おばさんの言つていた中央病院なのだろう。駐車場に車が駐まつている。

俺は階段を上りきると、木製の両開きの扉をゆっくりと開けた。

小さな教会だった。少し高い天井を見上げる。教会の中は昼間のやわらかな光で満たされている。

正面の十字架のイエス・キリストが俺と顔を合わせたくないのか斜め下を向いている。その足下のテーブルの上に火の消えた燭台が置かれている。教卓の上のぶ厚い本の表紙がつやつやと光っている。

天井近くに天使が描かれたステンドグラスがある。

俺は長椅子の並べられた真ん中、臙脂色の絨毯が敷かれた上を一歩ずつ歩いた。

古い木の長椅子には赤い座布団が置かれている。足音が絨毯の毛の上でふつと消える。燭台の両脇には零れそうなほど開いた花がいくつも束ねられて飾つてある。

横の壁のステンドグラスには聖母マリアと思しき女性がいた。飴のような色ガラスで作られた彼女は子供を抱えて瞬きもせず微笑している。髪のまわりに真っ白なコリの花が手向けられている。

生まれて初めて入った教会は、静かで明るい場所だった。

信徒たちはこの長椅子に座つて神に祈るのだろうか。俺は目を瞑つて知りもしない礼拝の風景に思いを馳せる。恵みや赦しを乞う人々、美しい聖歌とパイプオルガン、そしてそれをどこかお空の彼方で黙つて聞いている神様。

俺には今のところ何も祈る話題がないな。俺は眼鏡をはずしてもう一度十字架を見上げた。画質が落ちたように少しばやける世界の中で、ふとキリストの顔が俺を見たような気分に襲われて、俺は慌てて目を瞬いた。

するとその時、背中で扉の開く音がした。

誰だろ? おばさんが帰ってきたのだろうか。それとも主人だろうか。我に返つた俺はここが全く知らない人の家なのだということを思い出した。怪しまれるだろうか。そもそもクリスチヤンでないのに入つて良かつたのだろうか。

言い訳を考えながら振り向くと、全身黒ずくめの男が、ナイフを

持つて俺に近づいてきていた。

the knee, knot, knock, know, and his

後ろ手で扉の門を掛けると、刃物を持った男は俺に向かつて歩いてきた。

俺はそれに合わせて後ずさる。

男は黒いズボンを履き黒いパークーを着て黒いフードを被つている。窃盗犯のようなステレオタイプな田出し帽のせいで顔は全く分からない。背丈は俺と同じくらいだろう。俺はパニックを起こした脳みそを使って、あのナイフは刃渡り何十センチだろうかと考え出した。包丁より細く鋭利だ。大きさは包丁と同じくらいか、少なくとも果物ナイフよりは若干大きい。そして何にせよ血糊が付いている。鮮血ではなく、液体の乾いた跡が茶色くなつたような、触つたらべたべたしそうな血だ。

赤い絨毯の下、古くなつた木の床板が、男の履いた汚いスニーカーの一歩一歩に合わせて軋む。

俺はポケットの中をまさぐつた。ジャケット、ズボン、胸ポケット、シャツの胸ポケット、もう一度ジャケットの両方のポケット。俺は手汗で湿つた手のひらをスースの至る所にくまなくなすり付けた。ない。携帯電話がない。目が覚める前の記憶もないのに、携帯を持っているかどうかなんて覚えていないけれど、でも、これで持つていなかつたら、いや、電話、警察に電話、近くに誰か、俺はさらにお財布やベルト、袖、ボタンとめちゃくちゃに手を動かした、やばい、どうすればいいんだ、どうする、どうする？

男がナイフを握った腕を後ろに引いた。順手で掴んだナイフが間近の空気を突き刺して俺を狙う。

「やめろ！」

俺は怒鳴った。とつさに右の方へ避ける。が、男が俺の上着を掴む。俺がよろける。ナイフが俺の目線と同じ高さを通って俺の顔面に飛んでくる。俺は頭を下に下げてなんとか躱した。目は抉られずに済んだが、ジャケットを掴まれているので体自体は一步も動けない。離れようともがいた俺に引っ張られて男と俺は後ろへ倒れた。

十字架と明かり取りの窓の隙間に押さえつけられる。男の体重がかかつて重い。眼球を動かしてみるとすぐそばに白い壁紙に刺さった刃物がある。こびり付いた体液は小さな泡もそのまま固まっている。起き上がろうとして、刺すような痛みが頭に一瞬走り、ブチブチと音がしてナイフに刺さった頭髪がいくらか抜けた。

「人を呼ぶぞ！」

俺はもう一度怒鳴った。しかし男は何も答えない。顔も見えず、何を考えているのか分からない。門を空けておばさんか、帰つていかないなら旦那を呼びに行きたい。だが俺の目の前にはこの男がいる。

まだのしかかっている男が俺の首にナイフを突き刺そうとするより速く、俺は男の手首を強く掴んだ。ナイフが俺の喉に宛がわれつ

つ寸止めのまま止まる。ひんやりと冷たい刃物が俺の首筋に軽く触れたが、切れてはいない。男の力はそれなりに強かつた。それでも、俺の方が押して、立ち上がった俺と男は十字架の下のテーブルの前で静止する。筋肉に力を込めているせいで俺の手が小刻みに震え、それに合わせてナイフも震える。刃には俺の黒い髪と肌色の顔がぼやけて映っている。

ふいに刃に黒っぽい何かが反射するのが見えた。

俺の左の首筋に黒い何かが付いている？ 頸を引いても首にあるので見えない。

思わず力を緩めてしまつた次の瞬間、男は俺の下つ腹に思いっきり蹴りを入れた。

「がつ」

鈍く重い痛みが俺の息を止めさせる。口の端から唾液が垂れて温かな数滴が口唇を伝う。男は続けて靴の裏で俺の胴体を蹴飛ばした。胃の中の物が逆流して反吐を吐きそうになるが、喉の中間あたりでぎりぎり止まつて食道へ戻る。俺は十字架の掛けられている後ろの壁へ背中からがらがらと崩れ落ちた。

台の上の花や燭台がガシャンと音を立てて倒れ、台に掛けられた白い布が俺の背中に挟まれてずるずると落ちる。そのまま花も蠟燭も床に落ちて転がる。造花の束はばらけて、もた擡げていた花びらを見てみると十字架がはずれて倒れている。

まだ胃液でチリチリと焼けるように痛い喉へ、俺は大きく息を吸つて空気を通した。

ほんの瞬間棒立ちになつた男の隙をついて、俺はその襟首をぐつと掴んだ。そして男の被つている日出し帽に指をかけ、一気に引っ剥がした。

俺？

男はまるで、まるで俺の顔と同じような顔をしている。まるで同じだ。無表情な時の俺の顔をして、目だけこちらを向いている。俺つてこんな顔してるのか？ それにしては少し垢抜けない、ガキっぽい顔をしている。しかしまるで自分と瓜二つではないか。夢、教会、刃物の男、自分、俺の頭はもはや周章狼狽していた。

しかしその直後俺はさらに不思議な感覚に飲まれる。夢から覚めたような、深い海の底から急速に引き上げられ水圧に耐えきれないような感覚だ。脳の奥でデトネーションが起こり意識が爆碎されリセットされる。俺は瞬間にいろいろなことを思い出した。

数日前から眠るたびに見続けた殺人鬼になる夢、人をナイフで丁度こいつが持っているくらいのナイフで傷つける夢、そしてその後に見た正体不明の女の夢。だつてそしたら私がお母さんみたいでしょ？ 女の声がリフレインされる。俺は本当に一年間分の記憶を奪われたのだろうか。今俺の住んでいるぼろいアパート、バイト先のコンビニ、弟が高校に上がったことなど一通り思い出せたが、それは一年前の記憶なのかもしれない。様々な知り合いや場所の映像が湧き出ては消えていく。そしてその中に、彼女もいる……。

はつと我に返ると、左の脇腹で混じり気のない真っ赤な液体が止めどもなくジャケットに吸い込まれていた。

ナイフが動いたのは見えたのだが、思い出すことに意識が傾いてしまったのか躲しきれなかつた。

「ぐ……」

鋭い痛みが頭からつま先までを支配する。傷口を見ると更に痛みが増幅する。俺は掴み続けていた彼の襟首を放してしまつた。

そのとき、

「のりちゃん？ 何してるの、大丈夫？」

門のせいで開かないドアを叩きながら大きな声で呼びかける、女の子の声がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1068ba/>

---

Made in The Dream

2012年1月14日22時47分発行